

# 青森ねぶた祭

青森ねぶた祭を盛り上げる  
はねとの大乱舞も見どころのひとつ。

## ねぶたの由来

青森ねぶた祭は、七夕祭りの<sup>とうろう</sup>灯籠流しの変形であろうといわれていますが、その起源は定かではありません。

初期のねぶたの形態は「七夕祭」であったのでしょうか。そこに登場する練り物の中心が「ねぶた」と呼ばれる「灯籠」であり、七夕祭は7月7日の夜に<sup>けが</sup>穢れを川や海に<sup>みぞぎ</sup>流す、禊の行事として灯籠を流し、無病息災を祈りました。これが「ねぶた流し」と呼ばれました。

## ねぶたの変遷

享保年間(1716~1736年)の頃に、油川町付近で弘前のねぶた祭を真似て灯籠を持ち歩き踊った記録があります。その頃のねぶたは「奥民図彙(下図参照)」に見られるように、京都の祇園祭の山車に似ていたと思われます。

青森ねぶた祭の特色の一つに、はねとの大乱舞があります。昔はおどりこ(踊子)といました。いつの頃から“はねと”と呼ぶようになったかは定かではありません。しかし青森ねぶたに踊りがついていたことは、安永年間「1772~1781」の記録に残されています。

明治時代に入って青森ねぶたは一層大型化しました。明治3年(1870年)の浜町のねぶたは、高さ11間のもので100人で担いだといわれています。約20mもあるねぶたをどのようにして担いだのか、とにかく4kmも離れた横内から見えた記録されています。



「子ムタ祭之図」『奥民図彙』比良野貞彦 天明8年(1788年)

国立公文書館内閣文庫蔵

## ねぶたができるまで

1

題材と下絵



歴史的な物語などを題材に構想を練り、構想がまとまると鉛筆で下書きをして色をつける。下絵はねぶたの設計図なので十分に時間をかける。

6

紙はり



出来上がった骨組みに奉書紙をはる。のりとしてボンドを使い、はみ出さないようにはるのが一番難しいとされている。ここまですると、かなりねぶたらしくなる。

2

小屋がけ



ねぶたを作るためと、完成後の収納のためにねぶた小屋を作る。小屋の大きさは、間口約12m、奥行き12m、高さ約6~7mです。

7

書割り(墨書き)



墨で形を取る。純白のねぶたに墨で顔や手足、衿、帯、着物の柄などをかき分けていく。迫力をもし出す筆法でかき分けていく。

3

細部の下ごしらえ



顔・手・足・刀・槍などの細部をあらかじめ作っておく。割出しには、比例式で寸法を計算する。小屋がけが始まる寸前まで作業がすすめられる。

8

ろう書き



表現に合わせて、パラフィンを溶かして模様をつける。明るさをつけるとともに、色のにじみも防ぐための作業である。

4

骨組み



いよいよねぶた作り。まず角材で支柱を作り、針金や糸を使い紙をはがれるように形を作る。昭和30年ごろまでは、針金を使わずただで骨組みを作っていた。

9

色つけ(彩色)



残った白地に色をつける。染料と水性顔料を使い、筆書き又はスプレーで染色する。これでねぶたの本体は完成。

5

電気配線(照明)



昔はろうそくを使っていたが今は専門の配線工がねぶたの内側に照明器具を1000個以上取り付け。電源は発電機を使う。

10

台上げ



装飾のほどこされた高さ2mの車つきの台に、40~50人がかりでねぶたを上げる。これで全体の高さは5m位。制作者たちの感激の一瞬である。

詳しくは「青森ねぶた祭」  
ホームページをご覧ください。

